

実験体29号「織斑チナツ」

地味子好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

織斑家に新しい妹ができる話。  
可愛らしく、変わった妹が。

その妹が、『織斑』の運命を変える話。

# 目次

少女は姉と出会う。	1
少女は父を語る。	5
少女の過去と家族。	10
少女は狙われる。	17

少女は姉と出会う。

薄暗い地下、岩盤をくりぬいた部屋は冷たい空気が流れている。その中に白衣を纏った男が一人、パソコンの画面を見つめていた。「…もう、ここも終わりだな。」

眼前のパソコンには外の監視カメラの映像が映しだされている。完全武装した複数人の兵士…そして特殊な装甲服を装備した二名の女…。

さらにもう一人、スーツを着た女の姿もあった。

「軍のIS部隊に…さらに織斑千冬とはな…」

インターネットが普及したこの時代、よほどの秘境に住んでいなければこの世界最強のことを知らぬ者はいないだろう。

しかし男にとっては彼女は別の意味があった。

「父上の遺<sup>アーネンエルベ</sup>産か…」

その男はもう齢80に近い。その父親となるともはや軽く歴史の人になるであろう。

「…所詮私は父上の二番煎じだったのかもしれないな。」

男はそう自嘲気味に呟く。

「私の夢か…」

男に父親のような野望はない。唯、父の研究を超えたいという思いがここまで引き連れた。

その為にはなんだった。そう、文字通り悪魔に魂をも売り渡した。

…その結果28の命を天国<sup>ヒンメル</sup>へ送ることになったとしても。

しかし、その犠牲が最高傑作を生みだした。人間を超越する存在、新たなる進化のアーキタイプ。

文字通り、進化を止めた旧人類への報復兵器。

「先生…?」

後ろから声が聞こえた。可愛らしい少女の声だった。

「ああ、ノイン。私の可愛いノイン。」

少女―その体軀は彼女の、15と言う年齢の平均より小さめであっ

た。

しかし、誰もが振り向く黄金の髪と美しい碧眼。まさしく『帝国』が求めたアーリア人の姿であった。

「先生、どうかしたんですか？」

「…よく聞けノイン。今日は11月9日だ。そして…お前の誕生日でもある。」

「はい。先生、私の誕生日です。」

「…生まれてきてから15年。お前は私の夢をかなえてくれた。ありがとう。」

男の目からは涙が零れた。

「先生、泣いてるの？悲しいの？」

「いいや、このまま聞け。ノイン。私の最後の命令を伝える。現時刻をもって総統令第999号を完遂したものとする。」

男は机の上にある拳銃、ワルサーP38を少女へ手渡す。

「そして総統代行として第1000号を発令する。ノイン…私を殺せ。そして私の血でこの場所に我らのシンボルを描け！」

「…了解。すべてはわが父、総統閣下のために。」

少女の目から光が消え、銃を受け取った右腕は異形のものとなした。

そして男は立ち、叫ぶ。

「Ein Volk! Ein Führer! Ein Reich!

Heil Ahnenber!

Heil Deutschland! Heil Hitler!

ダン—と音が響いた。

「さようなら先生。…ようこそ先生。」

そして扉が開かれた…。

\* \* \*

その日、織斑千冬は地獄を見た。

その発端は1週間前、自身が教官として働いているこのドイツの地

で、悪魔的な研究が今なお継続されているという情報が諜報部より入った。

スイスとの国境にあるとある町、そこは昔から『ナチスドイツのオカルト研究が今なお続けられている』という都市伝説でそれなりに有名な街であった。

町民のほとんど：いや国民のほとんどがそれは単なるうわさに過ぎないと信じていた。

…とある日までは。

ある日、山へハンティングを行っていたとある猟師がソレを見つけた。

山中の崖にある扉のようなもの。そして猟師はすぐさま警察へ電話を掛けた。

その理由は扉に描かれていたある紋章、ドイツ人の中で知らぬ者はいない『負と栄光の時代』、それを表す、ハーケン・クロイツ鉤十字。

噂は：事実であった。

その後、現地の警察が調査を行ったところさらなる事実が判明した。

微弱ながらもI Sコアの反応が存在する。その事実はすぐさま軍部へ伝えられ、軍もこれに呼応し、今まで泳がせておいたスパイからの情報の確保と突入部隊の編成を行った。

そして：その突入部隊の指揮官としての白羽の矢が立ったのが、世界最強、ブリュンヒルデこと織斑千冬であった。

「…想像以上だな」

その施設に突入してからと言うものの、肝心のI Sらしきものは見つかっていない。

しかし代わりといわんばかりに人間の死体は大量にあった。それもほぼ数分前に自ら引き金を引いたようなものばかりであった。

「…教官、I S反応はこの先です。」

隣にいた教え子―『ラウラ・ボーデヴィツヒ』がそう言った。眼前には鋼鉄製の扉が備え立っている。

「よし、ラウラ、クラリツサ。位置につけ。突入したら速やかに制圧しろ。いいな、私が鍛えてやったんだ。後れを取るなよ」

「了解」

扉の前には二機の絶対無比な力、インフィニット・ストラトス。引き連れた鍵爆薬持ち開け専門の特殊部隊がその扉の蝶番を破壊する。

ボン―と小規模の爆発が起き、絶対無比の蹂躪が始まる、かに思われた。

「きよ、教官…これは…」

しかしその先に敵はいなかった。いたのは血濡れの少女と、一つの死体。

その先には、壁一面に少女によって鉤ハーケン・クロイツ十字が描かれていた。

「千冬…姉様…？」

そしてその少女は、その碧い瞳でこちらを見つめ、そう言った。

少女は父を語る。

少女を『確保』した町からほど近いケンプテン。

そこにはドイツ連邦軍病院がかつて存在していた。

既に閉鎖になった廃病院：しかし、そこは完全に潰されたされたわけではなかった。

軍が確保した特殊な：検体と呼ぶべき生命体。それらを閉じ込めておくための改装を施し、極秘裏に運用されていた。

「どうだ、彼女の様子は…？」

織斑千冬は現在、その廃病院にいた。

「はッ、意識はあるのですが…如何せん、状態が状態ですて…。」

人形のように美しい金髪に、宝石のような碧い目：そして私の事を「姉」と呼んだあの少女は今、最新設備のそろった病室に監禁されている。

担当についた軍医は黒うさぎ隊直属であり、いわば遺伝子強化兵に最も精通しているといつても過言ではなかった。

上は当初、『近隣の町から誘拐された少女』と言う見立ての元で医師他各種検査技師を手配した。

いわばメンタルケア関連を中心とした医師団だったが：こちらの意見を聞けばよかったものを。その手配された医師団は逆に自らが病院送りとなった。

偶然、少女のメンタルが不安定であったこと。そして部下のラウラ・ボーデヴィツヒが護衛についていたことからそれ以上の被害の拡大は免れたが…。

少なくとも二人が精神病院での本格的な治療が必要になった。

ぎりぎり病院行きを免れた奴からの証言では、『いきなり少女の腕が異形のものに変わり、次の瞬間、頭に走馬灯が流れた』と言ってい



た。

その後、少女には特殊な麻酔薬が投与され精密検査へかけられたのだが…。

「彼女は錯乱状態へ陥っていると思われる。…ブリュンヒルデ。貴女の名前をしきりに呼んでいます」

まだ私には結果が聞かされていない。あの薄気味悪い施設の調査報告も同じくまだ私の元へ届いていない。

「入っても?」

「10分でお願ひします」

少女が軟禁されている部屋の前に立つとまるで壊れたラジオのようにしきりに金切声が聞こえる。

私をここから出して。千冬姉様に合わせて…と。私は意を決し、その扉を開けた。

「…あ、ああ。千冬姉様…」

改めて、少女には惹き付ける容貌であった。

しかし、彼女を確保したあの施設のあの部屋、そこに描かれていたマーク…それを思い浮かべると少女のその容貌には別の意味があるように思えた。

金髪、碧眼の優秀人種<sup>アーリア人</sup>。『生命の泉』…。それはすべてあの崩壊した『帝国』を思わせるものだった。

私は彼女が括り付けられているベッドへ近づき、隣へ腰を下ろした。

「君は…」

「あ、申し訳ございません。千冬姉様。私とあなたはまだ一度も実際にあつていませんでしたね…」

彼女が私の事を一方的に知っているという事実はどうやら彼女の理解のうちである。

「私の名前はノイン・ウント・ツヴァンツイヒと言います。姉様の事は先生から聞きました。遠い、妹である…と」

「先生…？」

「はい。研究所で私やほかの皆にいろいろなことを教えてくださいました方です。」

…恐らく、あの部屋にあつた老齢な男性の事だろう。しかし、私の妹か…。それに29という単調な名前…

「君のことを教えてもらえるか？両親や、生まれなんかは…」

「勿論。年齢は15歳です。生まれは…覚えていません。昔から研究所で暮らしていましたから。でも、父様と母様の事は先生が教えてくださいました。」

彼女は純粋な視線で私の顔を見つめる。

「私の父様は、とても偉大な方でした。今でもその御威光は消えることを知りません。政治、軍事、思想、美術、すべてにおいて完全な方でした。子供と、女性と、動物に優しい紳士であり、酒も煙草もたしなまず、さらには菜食主義であられた」

そして私は見た。彼女の顔が、過去幾度となく見た狂信者のソレと同じになる瞬間を。

「ああ、何と素晴らしい父なのでしよう。私はなんと幸福な娘なのでしよう。結ばれたエヴァ・ブラウン<sup>母様</sup>どれほど幸せでしよう！父様が残した第三帝国の威光と我らの印たるハーケンクロイツは永遠に消えることはないのです。そしていつか再び全世界でこの言葉が叫ばれる日が来るのです！」

彼女はその腕を、体を異形のものさせ、拘束衣を破った。

「何を!？」

そしてその異形の右腕を前方に突き出し、叫んだ。

「ハイル・ヒトラー…ハイル・ヒトラー…ハイルヒトラー！」

私は信じられなかった。アレからもう数十年以上たっているというのに、彼女の言い放った言葉はこの国の暗黒にして栄光の時代の古き遺物であった。

今、そのような狂信であの男をたたえるものはネオナチにすらいなかった。そして彼女は言葉を言い終わった時、静かに眠りに落ちた。

「教官…無事ですか！」

彼女の叫びは外まで聞こえたのだろう。護衛として部屋の外で待機させておいたラウラが部屋に突入してきた。

「私は無事だ…。ラウラ、すぐに医療班を呼べ。彼女をもっと詳しく知る必要がある…。」

私は先ほどの狂った姿とは打って変わり、美しい寝顔を見せる少女に唯、恐怖した。

同時に、彼女を生み出した者を、果てしなく憎んだ。

## 少女の過去と家族。

少女を保護してから三週間がたったある日、織斑千冬はとある一人の女性医師のところへ赴いていた。

「二通り調査は終わったよ。ブリュンヒルデ」

年齢は40を少し超える女医は口元に皺を少し浮かび上がらせながらそう言った。

彼女の名はヨゼフィーネ・メンゲレ。黒うさぎ隊付の特務医師であった。だが、医師と言いつつも彼女の素性は研究者のそれに近い。何事も根掘り葉掘りと自らが満足するまで追及をやめない、そういう意味では彼女は「マッドサイエンティスト」の一種とも言えた。

「…その名前は、今の私には相応しくありません。」

「全くもってそうだ。ヤープ人は気負いし過ぎなんだよ。カロウシでもしたらこっちが悪者にされちまう」

ヨゼフィーネの言葉の通り、織斑千冬は組織に対する憎悪と少女に対し何の施しも与えられないことに対する嫌悪で半ばノイローゼのような状態になっていた。

三日後、十日後、二週間後と日に日に弱っていく彼女を見て、軍からは休暇命令が出ていた程だった。

「まあ、上がアンタに休めと言ってくれたおかげでこっちはノンオフィシャルで話ができるんだ。」

ヨゼフィーネはテーブルに来客用の少し高価なコーヒーを置いた。

今二人がいるのは少女が監禁されている病院ではない。そこから約百キロほど離れた田舎町にあるヨゼフィーネの自宅だった。

二人はコーヒーを口に当てつつ、目の前に広がるアマー湖を見た。白鳥やガンが羽根を休めている。

「…忌むべきあの戦争から長い年月が経った。」

ヨゼフィーネはその一言から語り始めた。

「かのオカルティスト、ハインリヒ・ヒムラーはあの伍長にこういったと言う。『千年帝国には人を超えた、新人類が必要である』——と。」

「新人類…?」

「奴がアーネンエルベと呼ばれる特務機関の長だったことは周知の事実…だが、そのさらに奥の奥。彼の子飼いの特務組織を知るものは極めて少ない。そう、あの帝国は人為的な進化をさせようとしたんだよ。新しい支配者階級を確固たるものにするために、自らを神にしようとした。」

カチン——と震えながら織斑千冬がカップをソーサーに置く。その顔は彼女の話から何かを悟ったようだった。

「戦前よりヒムラーは古のアーリア、ゲルマン神話を信奉していた。…それに加え、東洋の神つまりヤオヨロズと形容される神を信じる国にも興味を持った。そしてその国と帝国が同盟を組む数年前、アーネンエルベ極東支部がその国に生まれた。そこからその国、日本のオカルティストも彼はその秘めた意思に内包しようとした。」

彼女は本棚から数冊のファイルを取り出し、中の紙をめくり始める。

「だが、彼らの野望は果たされずに帝国は滅びた。…しかし、その灯が

消えることはなかった。1948年11月。アーネンエルベ極東支部は政府から黙認された状態で…とある計画を始めた。」

バインダーから紙を一枚切り離し、それをテーブルの上に置く。

「プロジェクト・モザイカ…良く知ってるだろう？こうも呼ばれた。  
—織斑計画と—」

織斑千冬の手はさらに震えを増す。

「責任者は…グスタフ・メンゲレ。死んだアタシの父親だ。」

ジョゼフィーヌ・メンゲレはさらに複数のファイルを出した。

「しかし…新人類創造計画はまた別のプランによって行われようともしていた。プロジェクト・モザイカが遺伝子改造による進化なら、こっちは機械と人類の融合だった。こっちはほうは…あの子の近くで死んでいた爺さんのパソコンに事細かに書いてあったさ。実験体29号について…もね。」

「……」

織斑千冬は何も言わない。

「その実験はドイツで続けられた。主任はヴィクトル・フランケンシュタイン。そう、不死身の兵士フランケンシュタインを作り出すつてわけだった。…私が調べた限りでは、あの研究所では10歳で機械化手術を受けることになってた。だか彼女が7つの時、とある事件が起きた。」

「…白騎士事件」

「そうだ。…まあ、一応隠しておくがどこかの誰かがISを使い、日本に向けて発射されたあまたのミサイルを切り捨て、日本を護った。それが起きたんだ。」

メンゲレはさらに写真を千冬に見せた。それはあの施設で回収された実験記録だった。

「既存の機械化兵士なんて、ISに比べればどれほど弱い存在だったか。ミサイルを迎撃する？バカ言うんじゃない。50口径のFMJを弾くこともできなければ40ミリのグレネード弾でただの人間と同じように四肢が吹き飛ばされる」

そこに映っていたのは機械と肉の塊。まだそれが人だったと分かるものもあれば、原型をとどめていないものも複数あった。

「だから、ISと融合させることにした。奴らの立場で考えてみれば至極当然で道理になっっているってもんさ。…クソが。人の命を何だと思っやがる」

そう言っ今度はタブレットを開いた。パソコンの中のデータをコピーしてきたものだった。

「急遽計画は変更、20号からは全部ISの適合手術が行われている。28号までは全員コアに耐えれず、29号の手術は彼女の成長まで大幅延期…だがこれだ。コイツを見てほしい」

その文章データは日記のようだった。日付は今年の10月5日。彼女の改造手術の一カ月前とも記述してあった。

そこに書いてあったのは3つ。



1つは英国にて成功例が生まれたこと。

そして2つ目はその改造担当者が次の手術を支援してくれること。

そして最後に――実験体29号は手術成功の後、彼女らの手に引き渡されること。

『彼女ら』、S i eと書かれたその組織がナチスの残党を支援していた。

その組織の事で千冬は心当たりがあった。

2年前の第二回モンド・グロツソにおいて、当時まだ11歳の弟――織斑一夏を誘拐した組織……。

千冬にはS i eとその組織が同じものとしか思えなかった。

「まさか!」

「ああ。そのまさかだとアタシも思う。ま、今日はこれを見せるのも呼んだ理由ってワケだ。アンタが帰る前にね」

「そうか。三月にはもう私は……」

ドイツ軍との契約期間は2年。その後はI S学園の教師として赴任することがもう決まっていた。

「あの娘は……ノインはどうなるんだ!」

「アタシが最大限手をまわした。2年。2年間の特殊コールドスリー

プで疑似冬眠させボーデヴィツヒの嬢ちゃんと一緒にIS学園へ入学させる」

「コールド…スリープだと！アレは！まだ実験段階だったはずだ！まだ試験も十分に…ッ！そういう事か！」

「ああ。厄介なんだろうさ。上は。あの子でコールドスリープ装置の実験をする。死んでも惜しくはないからだとき」

「そんな！そんなふざけたことが！上のやつらも所詮は…所詮あのナチス残党とやってることは変わらないじゃないか！」

千冬は激高した。許せなかった。上層部だけではない。彼女を助けられない自分が、悔しくて悔しくてたまらなかった。

「すまない…」

「いいさ。……アタシも同罪みたいなものさ。……コーヒーまだ飲むかい？」

そうやってメンゲレは立ち上がった。

「……ああ」

千冬は短くそう答えた。あと4カ月半、自分がやれるだけのことはしようーと。

「そうだ。忘れていたよ」

部屋の奥からメンゲレの声が聞こえた。手には新しくコーヒーが注がれたカップがある。

「あの子の遺伝子調査の結果をアンタに言うんだったね」

カップをテーブルに置いたメンゲレはファイルを取り出した。

「後天的に…金髪碧眼そして肌が白くなるように調整されている。  
…それ以外はアンタと同じだ。ブリュンヒルデ。彼女はアンタの  
……クローンさ」

少女は狙われる。

「姉様！」

扉を開けると、嬉しそうな声が聞こえてきた。

「ああ。今日も来たよ。ノイン」

私はあの日からこうやって毎日妹へ会いに来ている。

始めは10分だった面会時間もだんだん伸ばされ、今は2時間も一緒にいれるようになった。

「ふふふ、姉様のお話はとっても楽しみです。今日もいっぱいお話してくださいね？」

「ああ。今日は…そうだな。日本の料理の話でもしてやるか。」

今までの会話はほぼ全て日本語で行われている。

もともとノインは見つけ出された段階で、ドイツ、フランス、イタリア、そして英語が話せた。

それに加えて、短い千冬との会話のみで日本語を完璧に話せるようになっていた。

「なるほど。ヨーロツパとは全然違うのですね。それにしても生で卵や魚を食べて大丈夫なんですか？」

「ああ。生で食べる前提で期限やら保存やらがされてるからな。日本に行ったら一緒に食べよう」

「はい！とっても楽しみです」

言語はできる、といっても彼女の新たな情報源は現状数冊の各言語の本と千冬の話だけで元々の知識も研究所で教わったことのみ。

とにかく偏っていた。彼女にとって知っている音楽はクラシックのみでしかもその殆どがワーグナーだった。

書物だって、年頃の少女が読むような小説は読んだことがなかったようだし、甘い菓子の類も今まで食べたことがなかったようだった。

それもあって、ノインは私とのこの時間をとても嬉しそうに過ごしてくれていた。

「ノイン、何か飲むか？」

時計を見ると午後の四時を過ぎていた。ここにきてからずっと話しっぱなしで一息つくにもいい時間だった。

「はい。ではココアを……姉さまッ！」

いきなりノインが叫びその腕を異形のものへと変えた。

その次の瞬間、窓ガラスが割れる音と共に天井に穴が開いた。

「この発射音…感触、姉さま…これは151用の20ミリ弾です！」

「狙撃だと!?ラウラ！」

私は大声で外に待機させているラウラのことを呼んだ。

「ラウラ…!?おい！」

ラウラの反応は無い。不審に思った私は足に装備した拳銃を抜き、部屋の扉を開ける

「お？ やつと出てきたかー！ こっちは待ちくたびれたぜえ…」

扉を開けた先にいたのは山吹色の髪をした女だった。しかもその身体にはISーラファール・リヴァイヴを身にまとっている。

「貴様…！」

「おっと、できればこっちはテメエとやり合うつもりは無エ。あのヘテロクロミアのガキもちよつと眠ってもらってるだけだしよオ」

ラファールを纏った女の後ろにはラウラが倒れていた。

「何が狙いだ」

千冬は無駄と知りつつも拳銃を女へ向ける。

「アンタがたいそう大事にしてるそのガキをこっちへ寄越せ。つーか、もともとそれはアタシたちのモンだからよオ」

「貴様らが例の…！」

あの老人がSieと呼んでいた組織、そのメンバーが目の前にいる。だがいくら千冬でも生身で軍仕様のISと立ち向かうには今は不可能だった。

「姉さまッ！」

「おっとッ！」

ノインはISの両腕を部分展開し私の前に立つ。

「おうおう、おいでなすったか。早速だが、アタシら…亡国機業の元に  
来い。あのジジイから聞いてるんだろ？」

「嫌です！私は姉さまと一緒にいるんです！」

「チツ！あのジジイが死んだおかげでいろいろ面倒くさくなりやがっ  
た。コイツは使いたくなかったんだけどな。まあいいや」

女の手握られていたのは何かのスイッチだった。

「それはッ！」

「御察しの通り、このボロイ病院を発破解体してもいいんだぜエ？  
さあて、お前が来るのを拒否すれば何人死ぬだろうな？」

持ち出したのは古典的な戦法―だがしかし、今のノインにとっては  
効果的な戦法だった。

ノインも目に見えて呼吸が激しくなっている。

「死ぬ…？？死ぬ、死ぬ、死ぬ！シヌ！しぬ！死ぬ！死んじゃう！！みん  
な死んじゃう！」

「ノイン!？」

違う。ノインは爆弾と自身の葛藤で呼吸が荒くなっているわけ  
はない。

死ぬという一言に反応して錯乱しているように見えた。

「死ぬのはイヤあああああッ！」

ノインが叫んだ瞬間、彼女の背から黒い触手のようなモノが何本も飛び出る。

「なッ!？」

その触手は一瞬のうちに女のラファールへと突き刺ささってゆく

「これはッ！なんだ！急に暗く…？ああッ！やめろッ！やめろッ来るな来るな来るなッ！クソッ！あ、あああ！アアアアア！」

女はいきなり叫びだした。まるで目の前で誰かが殺されたかのように錯乱し始めた。

ISを展開したまま、座り込む。そして何かから逃げ出すかのよう  
に床を張って逃げようとした。

「オータム！ISを解除しなさい！」

「あ、あい、えすを、か、解除！」

新たな声がした。

その声の主もまた、ラファールを装備していた。だがそのカラーリングは燃えるような赤だった。

「はじめましてねえ。織斑千冬。今回のところは私達の負け。挨拶も



ろくにできなくて悪いけど、帰らせてもらおうわ」

そのもう一人の女は、オータムと呼ばれた女を抱え、天井を破壊する

「ッ！待てッ！」

しかし、そう言ったときにはもう二人の姿は空の彼方へ消えていった。

「ノインはッ！」

ドサツと後ろで倒れる音がした、

「ノイン！ノイン！」

千冬は必死に彼女に呼びかける。

「姉さま…よかった…」

意識はある。だがまだ呼吸は荒い。

「ブリュンヒルデ！すまない！地下の防護隔壁が降りて出られなかった。ノインは！」

「ヨゼ、ノインのI Sのことは……あの研究所のデータにあったか？」

「いや。なかった。どれだけ探しても欠片もね」

「そうか…。ノインとラウラを」

「ああ。すぐに地下のほうに移す」

「頼む」

亡国機業と名乗った襲撃者はもとより、ノインのISの能力。どちらにしてもまだ不明な点があまりにも多かった。

千冬はガラスでめちやくちやになった部屋へ戻った。

たった数分の出来事だったが、織斑千冬が亡国機業への憎しみを強めるには、時間など関係なかった。